

特集：鉄道産業文化遺産の保存と活用

【地域の観光活力を創出するー東武鉄道SL「大樹」】

# 日光・鬼怒川エリアの 観光活力を創出する

SL復活運転プロジェクトの目的の一つに「日光・鬼怒川エリアの観光活力創出による地域活性化」が謳われている。特急ネットワークの充実と増備、世界遺産や自然に恵まれた日光へのさらなる誘致と開発、鬼怒川温泉とその先に線路をつなげる野岩鉄道・会津鉄道を含めた周遊とプロジェクトのもう一つの目的である「東北復興支援」、そして、近年さらに増えているインバウンドを視野に入れた施策など、SLの周囲でもさまざまな積極策が取られている。地元地域との連携を重視した観光振興策についてレポートする。

文◎茶木 環／撮影◎織本知之／人物撮影◎小野田麻里・加藤有紀／写真提供◎東武鉄道株式会社



### 集中投資が行われる観光地

東武グループの「中期経営計画2017～2020」で日光・鬼怒川エリアは、浅草・東京スカイツリー、池袋、銀座・八重洲・湾岸とともに集中投資が行われる重点エリアに指定されている。他エリアの投資が都心部に於ける再開発であるのに対して、日光・鬼怒川エリアは唯一の観光地であり、豊かな自然と歴史・文化を有する同エリアのポテンシャルを最大限に活かした振興策が計画、進められている。

「当社沿線の北関東では人口減少が続き、交流人口の増加が大きな課題となっている。また、日光・鬼怒川エリアが観光地として抱える問題には、季節波動が非常に大きいこと、入込の割に宿泊客が少ないことがある。通年型・滞在型観光地として発展させていくために何ができるか。その施策の一つがSL復活運動だった」と経営企画本部の岩澤貞裕部長は語る。

日光・鬼怒川エリアの中でも、二社一寺周辺と中禅寺湖・湯元周辺を合わせた日光エリアでは宿泊者数を伸ばす。温泉街の鬼怒川エリアと日光・鬼怒川への玄関口となる今市エリアは、SL復活運動を観光資源に観光まちづくりを進める。3エリアの新たな魅力を創出し、そのシナジー効果で、都心からわずか2時間で行ける国際エコリゾートとしての確立を目指している。

### 広域交通とエリア内二次交通の充実

日光・鬼怒川エリアへのアクセスを含めた交通施策から見ていこう。

東武鉄道では浅草を起点に日光・鬼怒川方面への特急列車をピーク時には約30分に1本運行しており、土日・祝日を中心に1日3往復するSL「大樹」に接続するダイヤも組まれている。

こうした都心部からの頻度の高い運行を実現できたのはSLと同じ2017年に登場した、東武鉄道にとっては26年ぶりの新型特急車両「リバティ」の存在が大きい。併結・分割機能を有し、途中駅で列車を併結・分割することで多線区の運行ができる。分岐点である下今市駅での乗り換えも必要がなくなった。都心と日光・鬼怒川エリアを結ぶ特急列車の本数は平日5本、土休日は9本増便されている。

さらにリバティは、鬼怒川線終端の新藤原駅から野岩鉄道、会津鉄道の路線を走り、会津田島駅まで乗り入れる。浅草や北千住から会津田島まで乗り換えなしで行けるこの相互直通は、都心からの観光客や会津地方の住民の流動につながり、福島エリアの活性化の一助となっている。鬼怒川温泉エリアから会津エリアがフリー区間となる「ゆったり会津 東武フリーパス」の2017年度の売り上げが前年度比17%増となっていることから、リバティが移動の動機付けになっていることがうかがえる。

会津鉄道も、快速列車「AIZUMA ウントエクスプレス」を、会津若松・鬼怒川温泉間に1日1往復、会津若松・東武日光間に1日2往復運行。

「心理的にも会津と日光・鬼怒川エリアは非常に近い距離になっている」（岩澤部長）という。

日光・鬼怒川エリアの二次交通の充実を図り、回遊性向上も進めている。

グループの東武バスでは、鬼怒川温泉と日光を結ぶ日光鬼怒川線を新設。かつて日光市内を走行していた路面電車、日光軌道の100型ボギー車をデザインした特別車両を走行させている。運行はSL大樹の発着に合わせ、東武日光駅、世界遺産の社寺を乗り換えなしで結ぶ。中禅寺、湯元などの奥日光や各方面に向かうバス路線も拡充して、「鉄道+バス」で日光・鬼怒川エリア全域を観光できるように環境を整えている。

「日光と鬼怒川、今市にはそれぞれに行ってみたい、その地域ならではの魅力がある。エリアを広域で捉えて二次交通網を充実させ、回遊性を高めている。現在、日光を訪れる観光客の9割は自動車利用となっており、バス専用レーンを設置するなどの社会実験も行われているが、パークアンドライドあるいはパークアンドバスライドで公共交通を利用してもらいやすいようにすれば、渋滞解消にもつながる」と岩澤部長は期待を寄せる。

その一環として、企画乗車券の充実にも取り組んでいる。SL開業と同時に発売が開始されたものに「日光・鬼怒川エリア鉄道乗り放題きっぷ」があり、エリア内を気軽に周遊できると好評だ。

また鬼怒川線には、昨年7月に東武ワールドスクウェア駅が新設され、「東武ワールドスクウェア」へのアクセスも至便となった。さらにグループが営業している中禅寺湖の観光遊覧船には、新型遊覧船「男体」を導入。地域観光の目玉を増強している。

### インバウンド施策の拡充

訪日外国人旅行者を対象にした施策としては、日光・鬼怒川エリアの外国人専用企画乗車券「デイスカウトパス」のリニューアルがある。今年7月、これまで5種あったパスを、従前の特典にロープウェイや中禅寺湖の遊覧船などの利用を加えて回遊性を高めた「NIKKO PASS all area」、従前と同内容のまま価格を下げた「NIKKO PASS world heritage area」の2種に



経営企画本部 部長  
**岩澤貞裕**  
Sadahiro IWASAWA



会津田島駅まで乗り入れる特急リパティ



新設された東武ワールドスクウェア駅



左／2017年夏に就航した新型遊覧船「男体」。右／路線バスでは日光軌道タイプの特別車両が運行



8言語に対応する新型自動券売機

絞り、外国人にも分かりやすい設定にした。

また、東武日光駅と鬼怒川温泉駅には、これまでの日本語・英語のほか、中国語（繁体字・簡体字）・韓国語・フランス語・スペイン語・タイ語の8言語に対応した新型の自動券売機を導入。東武

日光駅構内のツーリストセンターには、日光コンシエルジュが常駐して日光エリアの観光地や施設を案内するなど、エリア内のホスピタリティ向上に取り組んでいる。さらに駅構内には祈禱室を設置して、ムスリム旅行者の受け入れ環境を充実させた。

「国は2020年までに、訪日外国人旅行者数年間4000万人を目指している。われわれも日光・鬼怒川エリアにより多くの訪日外国人旅行者をお迎えしたい。各種環境の整備や強化を進め、お客さまにとって行ってみたい場所、行きやすい場所に磨き上げていく」と岩澤部長は語っている。

### 3エリアの観光推進と地域活性化

東武鉄道の日光・鬼怒川エリアの中でも日光エリアでは、滞在のための宿泊施設の整備が進められている。

日光国立公園の中禅寺湖では、湖畔に建つ日光レイクサイドホテルを建て替え、「ザ・リッツ・カールトン日光」として、2020年夏に開業を予定。日光市田沼沢地区の旧御用邸付属跡跡



一般社団法人日光市観光協会  
事業課長 兼 今市支部事務所長

**舟越隆裕**  
Takahiro FUNAKOSHI

地には、高級温泉旅館「日光ふふ」（仮称）を誘致し、2019年秋に開業する予定だ。一昨年夏には、名門金谷ホテルも東武グループに参画した。

「中禅寺湖がある奥日光と呼ばれる地域は、かつて欧米の大使館別荘が多くあった国際的なリゾート地。そうした歴史を活かし、長く滞在し、豊かな自然と時間を楽しんでいただけの環境を整えていきたい。訪日外国人旅行者への訴求も含め、これからの観光地づくりは、多様化する観光客に向けて多くの選択肢を用意し、いかに楽しみやすく、選びやすくお伝えしていくかが重要だと考えている」（岩澤部長）

鬼怒川エリアと今市エリアのトピックスはやはりSL大樹であり、鬼怒川線をSLが走る「テーマパーク」と位置付け、地域と協働で沿線活性化策に取り組んでいる。

特に今市エリアは、下今市駅が日光・鬼怒川の分岐点であるだけに、これまで観光客にとっても通過地点というイメージが強かった。しかし、SL大樹がここから出発し、「昭和」を感じさせる駅舎や転車台を中心とする見学エ

# 特集：鉄道産業文化遺産の保存と活用

【地域の観光活力を創出する—東武鉄道SL「大樹」】



上／2020年夏に開業予定の「ザ・リッツ・カールトン日光」  
左下／東武グループに参画した「日光金谷ホテル」

鬼怒川温泉駅前広場に設置された  
たき子焼のSLモニュメント



左・上／一部リニューアルした  
鬼怒川温泉駅。大きな提灯  
が目を引き

リアが整備されたことによって、駅そのものが観光拠点になり、今市のまちにも変化が生じている。

「今市は日光市の中心ではあるが、観光という点では少し出遅れていた。まちの人も自分の住む地域が観光地だという意識が薄かった。けれどもSL大樹によって、『SLが走るまち』になり、私たちのまちの魅力をもっと知ってもらいたいと、住民の意識も大きく変わってきている。2015年には、まちなかを通る国道119号沿いに道の駅もでき、観光資源は掘り起こせばたくさんある。SL運行日以外にも今市に足を運んでまち歩きを楽しんでもらいたい」と、日光市観光協会舟越隆裕事業課長は期待を込める。

実際、下今市駅の改札を出る人の数は、SL運行開始前と比較して、2割増えているという。

## 「大樹」を軸にした地元と協働の活性化

SL運行によって地元と協働で地域を活性化したいという東武鉄道の意向は、SL大樹に乗務するSL観光アテンダントが東武鉄道ではなく日光市観光協会に所属していることにも表れている。

現在6人が在籍するアテンダントの一人、福田結さんは「初めて大樹を見たとき、こんなに人の心を動かすものが私たちのまちを走



一般社団法人日光市観光協会  
事業課 観光アテンダント

**福田 結**  
Yui FUKUDA

るのかと、とても感動した」と語る。

アテンダントは車内での接客のほか、乗客に配布する「アテンダント通信」（隔月発行）を制作。沿線の見どころやSLに関する情報を紹介する。

「SLはもちろん、通過する沿線地域にも関心を持っていただきたい。日光・鬼怒川エリアの魅力をどうやってお伝えするか、何をお知らせするか、常に考えている」（福田さん）という。

「観光協会が列車のアテンダントを抱えているのはほかに例がないと思うが、乗客や観光客に地域の情報をダイレクトに伝えることができるのが大きな強み」と舟越事業課長は説明する。

アテンダントが今市のまちなかをガイドする街歩きツアーも企画され、好評を博した。SL大樹のリピーターにはアテンダントとの会話を楽しみにしている人も多いという。

また東武鉄道では、日光市の観光協会や商工会議所に所属する企業には、SL大樹の画像やナンバープレート、ロゴマークの使用を、エリア内のみでの販売という条件付きながら無料で許可し、各社によるオリジナル商品の開



上/ SL 大樹の入線と同時に記念撮影が始まる。機関士も一緒に  
右/ 鬼怒川温泉駅に着いて乗客を見送る SL 観光アテンダント



沿道から手を振る地域住民に、乗客も手を振って応える



手を振って乗客を見送る駅スタッフ

発を推奨している。

観光協会が認可を委託されているが、これまでに62件認可され、酒や弁当、手ぬぐい、まんじゅうなどの菓子類、温泉の素などさまざまな「大樹ブランド商品」が販売されている。こうした形で地元の企業や店舗が「観光」や「おもてなし」について考え、自分たちで地域の魅力の一部をつくり出している。

「東武鉄道は地元優先という方針から、東武鉄道が日光・鬼怒川にお客さまを輸送し、地元がおもてなしをするという役割分担でやってきたが、人口減少や社会構造の変化に伴い、沿線地域と深く関わるようになってきた。しかし、当社が何でも地域に入って抱え込んでしまっただけでは活性化の波を持続できない。東武鉄道がきっかけをつくり、地元も当事者として積極的に活動することによって真の活性化が実現する。われわれも変わり、地元も変化している。双方が刺激し合うことが重要」と岩澤部長は語り、「地元にはやる気とエネルギーに満ちた方々が大勢いらっしやる。そうした方々と手を携えて一緒にやっていくというのが東武鉄道のやり方」と熱意を見せている。

### 「いっしょに楽しむ」活動

一方、日光市観光協会と沿線地域の商工会議所、青年会議所、自治会、旅館組合、飲食店組合、まちづくり推進

団体等が一体となつて、2016年11月には「いっしょに口

コモーション協議会」(オブザーバー・日光市・東武鉄道)が設立されている。沿線地域が主体となつてPRや各種のおもてなしに取り組み、誘客による地域経済の活性化や地域のファンづくりを図ることを目的としている。

「SL大樹にみんなで手を振ろう」プロジェクトも、その活動の一つで、鬼怒川線を走る大樹に向かって沿道などから手を振ろうというもの。大樹が何時頃その場所を通過するか記載されたマップ(アテンダントが作成)を配布するなど周知に努めた結果、今では沿線全域に浸透している。

「SL大樹のお客さまは、地元の方々に手を振ってもらうことをとても喜ばれ、一緒に手を振り返している。言葉は交わさなくても交流が生まれている」と福田さんは車内の盛り上がりの様子を語る。

また、「鬼怒川線に季節ごとの花を咲かせよう」プロジェクトは、乗客に車窓からの景色を楽しんでもらえ



手書きで制作する「SL アテンダント通信」

# Column

## 東武鉄道の好意に応え、 商品開発で 地元の活力を



株式会社渡邊佐平商店  
代表取締役

渡邊康浩

Yasuhiro WATANABE

当社は1842年の創業以来、日光山麓のとても質のいい名水で酒造りを続けています。SL大樹が運転を開始して、観光客の方々が下今市駅を出てまちなかを周遊するようになったからでしょう。当社の酒蔵見学にも若い女性観光客が来てくれるようになりました。それまで住民中心となっていた印象の今市のまちが、少しずつ変わってきました。観光を意識して、外から訪れた方をおもてなしするようになったんです。

また、商工会議所や観光協会に加盟する企業は、著作権無料でSL大樹の関連商品を制作・販売することができます。当社もこれはチャンスだと思って、オリジナルの純米吟醸日光誉 SL ボトル（720ml）と特別純米酒 SL 大樹カップ（180ml）の販売を開始しました。実は私自身、鉄道好きなこともあって、こんなすごいことはないかとボトルやカップのデザインに大いにこだわりました。地元で獲れた米と栃木県で開発された酵母を使った純米吟醸酒はSLをイメージして、黒いボトルに大樹をゴールドの線画で描いています。カップもSLの絵を描き、カップには清酒の記載をせずにシール式のキャップにだけ記載して、持ち帰ってお子さんに使ってもらえるようにしました。

商工会議所の青年部のメンバーにも「これは地元企業にとってメリットが大きいので絶対取り組んだ方がいい」と話して、それから商品を開発したメンバーも多くなります。今市はまだ観光業者が少ないので、土産品に対するアンテナや感覚がどうしても希薄ですが、少しでも観光にかかわっている私たちから発信していけば、地元の人たちにも広がっていくと思います。東武鉄道の好意に地元として応えて、地域の活力につなげていきたいですね。

私はSL世代ではありませんが、やはり魅力的だと思いますし、地元で走っているのは誇らしい思いです。汽笛がまちに響くのもいい。かつてあったものが帰ってきたのだなと思います。そしてSLの存在が地元で少しずつ浸透してきていると強く感じています。SLが走るまちを盛り上げていきたいと思っています。



日光市のイベントと連携して特別列車も運行。「春節祭」のSL大樹



SL大樹とコラボした渡邊佐平商店「純米吟醸日光誉」

るように休耕地に花を植栽するプロジェクト。倉ヶ崎地区の住民組織「倉ヶ崎明日を考える会」がプロジェクトに賛同、大谷向一大桑間に約4000㎡の花畑を整備している。

さらに今年8月10日に開催された「SL大樹運行開始1周年感謝祭」では、SL大樹と地域の公式イメージソングが発表された。

舟越事業課長は「SLは観光コンテンツとしても強力だが、その存在自体がまちを変えたと実感する」と語り、福田さんは「観光PRを含め、SL観光アテンド独自目録で、SLに乗車されるお客さま、日光市に来られたお客さまにおもてなしをしていきたい」と熱意を見せている。

開業から1年が経過して、SL大樹は鬼怒川沿線の新たな観光資源として地域に定着した。日光・鬼怒川エリアでは、地域との協働で観光活力を創出し、「地域力」を上げる取り組みが進む。

「東京から2時間のエリアに、豊かな自然も世界遺産も温泉もリゾートも楽しめる魅力的な場所があることを知っていただく努力を続けていきたい。多岐にわたる事業に取り組むグループの強みを活かして、東武鉄道ならではの観光地づくりに取り組んでいく」と岩澤部長は意気込みを見せる。

地域に活力をもたらす観光鉄道としても、鉄道産業文化遺産・SL大樹にかかる期待は大きい。